いぶかる私に、「父が校長ですから」と答え、あぜんとしました。

しかし、教員に適任と思った学生が不採用の連利きや縁故の入り込まない公正な採用の仕組みを考え、成績の上位者から順番に採用するよう改めるべきだと思います。

心臓外科医 泉本 浩史（秋田市 51）

10年前の手術 お礼され感激

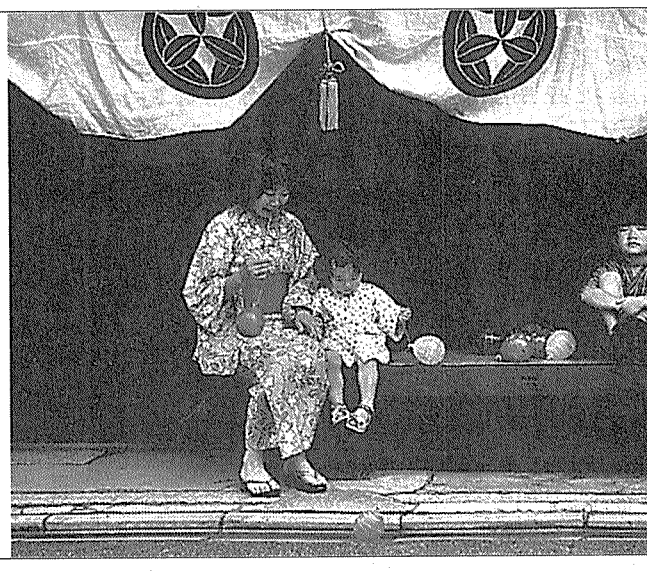
「先生、私を覚えていますか。先生に手術していただき、こんなに元気です」。先月末、通院する盛岡市内の医院で、初老の女性に話しかけられ、びっくりした。

これまで5、6千人の手術に携わったが、意外にそれぞれを覚えている。約10年前、手術後の脳出血から手足がまひ、失語症になった方だ。私は、予後を心配していた。横浜で療養後、レストランの裏方として働くほどに快復。今は古里に帰り、夫と年金生活という。

彼女は毎日、私に治療してもらったが、しゃべれなくて礼も言えなかった。それが心残りで、私の顔を脳裏に焼き付けていたから「一目で、すぐ分かりました」。そして「ありがとうございました。今日、先生に会えて良かった」と話した。

なんと幸せなことか。患者さんとの再会から、言葉や動作が不自由な患者さんとの接遇の大切さを再認識した。明日からまた、自分の目標とする手術を極めていきたい。

10年目の「ありがとう」に、ありがとう！



祭りの日 大阪府箕面市 福島 勢津子（全日本女性写真コンテスト）

朝日川柳

西木空人選

成果あり言ってる方も本音かね　町田市 中山 威

メンツのために拒む開門　相模原市 瀧 正治

狭き門コネとカネとでこじあける　神奈川県 桑山 俊昭

社会科に追加の科目裏社会　厚木市 泉井 康

並ぶ阿呆に買わない阿呆　北海道 藤原 康男

☆それ以来畏れ多いと便秘がち　多摩市 林 明倫

試合にも出ずに出ている週刊誌　さいたま市 脇田 徹

一句、サミット。二句、農水省控訴。三、四句、大分。五句、iPhone上陸。六句、天皇がタヌキの糞で論文。七句、巨人某選手。

寄せ返す海に、再び生き返らせてほしい。

と分からないため、屋間は中国語のテレビ番組を

opinion

KYのすすめ 「異なる他者」とつくる社会

異見新言

竹井 隆人 政治学者

コミュニティー（共同体）の大切さを否定する人は少ない。だがその連帯の強化を主張することは、果たして「正しい」のか。在野の政治学者が逆説的に問う。

昨今、いよいよ言葉が溢れ、それへの感受性が失われている。世には時流に乗った言葉のみが幅を利かせ、その勢いに人々はただ呑まれているのだ。

「コミュニティー」なる言葉もそうだろう。「仲良し」の奨励、またはそれによって成り立つ「仲良し社会」の意で多用されるようだが、この語感のよさゆえに「コミュニティー」に疑念を向ける人はいないだろうし、そうした世間の「空気」におもねる知識人たちは、いたずらに「コミュニティー」を弄するのだ。

▼

しかし、「仲良し」を強化すればするほど、その社会が排外的になるのは無論のこと、内部では異論者を「KY（空気を読めない者）」として「粛清」することともなる。この大勢順応が社会を支配すれば、人々は自らが社会を主体的に担う自由を放棄する。だからこそ、この「社会をつくる自由」が眠りこけた社会は戦前だろうが戦後だろうが、政治学者の丸山真男が評したように「無責任体制」に堕してしまうのだ。

「コミュニティー」重視を叫ぶ者は、「社会をつくる自由」を踏み潰すことにいささかも頓着せぬほど悪者であるか、それに気づかぬほど愚者であるかのどちらかに違いあるまい。

では、同調圧力に屈する宿命を負い、他者との差異を競おうとする低俗なる自由とは一線を画した、「社会をつくる自由」は如何にすれば覚醒するのか。その契機を私はデモクラシーに求める。だが、それは戦後社会の基軸たる代議制デモクラシーとは別物だ。代議士選出やゴチャ混ぜとなった争点をめぐって、数年に一度あるかないかの選挙のみで「社会をつくる自由」を果たしたなどと自任する人はまずいないし、投票日に「責任ある一票を」などとマスコミがいくら騒ごうと誰も応じやしないのだ。

そこで直接制デモクラシーを志向した政治思想家もいる。ハンナ・アーレントは全市民が一堂に会してその社会の行き方を決する古代アテネの政治装置「アゴラ」を夢想したし、ベンジャミン・バーバーはこの政治型式を「ストロング・デモクラシー」と命名して、その普及を説いた。彼女らの理想は、それを現実の政治装置に比定しえぬため未達のままだが、私はその舞台を集合住宅に求めることを拙著等で論じてきた。

▼

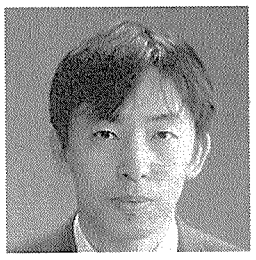
分譲マンションの管理組合では、全住民が直接に参加する総会といった、いわば「私的政府」が集合住宅を統治する。この「私的政府」をすべての地域に設置し、地方自治体から大幅に権限を委譲すれば、究極の地方分権も可能だろう。

「私的政府」での参加や熟議を介して、全住民に、他者や社会に対して自らの発議や決断が何らかの影響を与えたと自覚する責任を生じさせることにもなる。

この「集合住宅デモクラシー」が一定の領域に限定した社会（人間関係）であることは自明だが、それによって醸成される「社会をつくる自由」が、より大きな規模の社会をつくる地ならしをすることも可能だ。なぜかといえば、「仲良し」では限定的な社会しか生まれず同一社会内の他者を自らの「分身」とみなす悪弊を伴うのに対し、「社会をつくる自由」は他者が自らと異なる存在であることを前提とした社会構成原理を奉ずるからである。

哲学が古来より命題とし、あるいは現代思想やらポスト構造主義やらに至っても思い悩んでいるのは、社会（構造）に対する主体性のある自己の実現であろう。それを解くのは「社会をつくる自由」であると、私は確信している。

ただ「仲良し」を言うだけなら幼児にさえできる。必要なのは、人々が社会に対する順応を放棄し「KY」とならざるを得ない状況をつくり出すことではないか。このまま人々が「社会をつくる自由」を発現しえぬ、つまり、社会に何ら責任を負えぬのならば、人民主権を意味するデモクラシーという言葉も虚妄のまま果てるしかあるまい。



68年生まれ。東大大学院修士課程（政治専攻）修了。博士（学術）。政府系金融機関勤務。著書に「集合住宅デモクラシー」「集合住宅と日本人」。

集合住宅、民主制のモデルに

あるという。

秩父市国際交流協会の春の日本語教室に、彼女は母とともに参加。喜んでいたが、その後は秋まで何もない。ネットで探した日本語教室は遠く、授業料も高い。とりあえず、ゴムボートで川下りをするラフティング業を営む我が家の受付や事務を手伝ってもらいながら、私たちはお互いの言葉を学び合っている。

国際結婚や仕事などで来日する外国人が増えている。この人たちの日本での生活、特に日本語習得までを支援する取り組みが急がれている、と感じ、その練習船に廃止されようとしています。

「絶滅危惧種」と呼ぶ人もいますが、私は優秀な船員育成の原点の船だと思います。財政難とはいえ出費を惜しみ、後悔してはなりません。化石燃料が枯渇した際の有効な動力ともいい、その技術を伝えるべきです。

20日は13回目の海の日です。昨年の海の日には、海洋基本法が施行され、その第20条に「国は船員の育成及び確保等の必要な措置を講ずる」とあります。ぜひ、蒸気タービン練習船を存続させて下さい。

■投稿先は ◆〒104・8661東京・京橋支店私書箱300号、朝日新